

# 学会ニュース

日本女性学会

第29号 1986年4月

## 目 次

- 第7回総会等のご案内 ..... 藤枝 滯子 ..... 1
- 1986年度日本女性学会総会および関連行事日程 ..... 2
- 同、開催地等について ..... 3
- エスノメソドロジーと女性学 ..... 加藤春恵子 ..... 4
- 「フェミニスト・サイコロジー」を読む ..... 賀谷恵美子 ..... 5
- さわやかな腑分けのために、知的実験の場を ..... しまようこ ..... 7
- 1986年度幹事選挙開票結果について ..... 9
- 本会会員が行なった1985年の女性学に関する研究・活動報告(2) ..... 10
- 会員住所変更 ..... 12
- 編集後記 ..... 13



## 第 7 回 総 会 等 の ご 案 内

代表幹事 藤 枝 濤 子

「女の時代」—— 近ごろよく目にする言葉です。たしかに、10年前にくらべれば、女性問題の情報量は飛躍的にふえました。様々な分野で活躍する女性の姿も注目を浴びるようになり、女性の社会的発言も目立って増加しています。日本女性学会が発足し、また、女性学が曲りなりにも市民権を獲得するようになったのにも、そうした背景がありました。

とはいえ、国際婦人年、国連女性の十年といった“外圧”なしに、はたして日本社会が自前でこうした変化をうみだしていただろうかを考えると、首をかしげる人は多いのではないのでしょうか。それかあらぬか、「女の時代」の呼び声とは裏腹に、国連女性の十年終結に呼応するかのよう、女性問題解決への努力は、とりわけ行政レベルで、目にみえて引き潮状況にあります。今後の日本の教育を決定的に方向づける臨教審の審議をみても、女子教育のあり方は、女性差別撤廃条約をはじめとする世界の趨勢に逆行して、性別分割を内包する「伝統的価値規範」や「日本人としての自覚」に収斂される危険性をはらんでいます。

女性の状況のどこが変化し、どこが変わらないのか、労働の権利と子育ての権利の両者を両性が統合しうる社会的基盤の成立、成熟を妨げているものは何か、有限の地球資源を地球上すべての人びとと共有し、女も男も、老人も子どもも、すべての人が心豊かにのびやかに平和のうちに生きられるようにするには具体的に何が必要なのか—— 研究、教育、実践の面からこれらの問題に迫っていくことが、今、日本の女性学に関わっているのではないのでしょうか。

そこで、今年の総会関連行事では、「日本の文化的土壌とフェミニズム」と題して、シンポジウムを企画しました。そして、年間を通じて、研究会でもこの問題に様ざまの角度から光をあてていくことを、現幹事会の提案といたします。研究、実践発表を含めて、皆さまの積極的なご参加を期待しています。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

今年度総会は、先に5月31日～6月1日とご案内しましたが、予定した会場の都合が悪く、急遽、6月7～8日とし、会場に国立婦人教育会館を使わせていただくことになりました。すでに予定をたてておられた会員の皆様にご迷惑をおかけしたかと思えます。不手際をお詫びいたします。

日本女性学会もやがて創立十周年を迎えます。活動を活性化し、活力ある学会として10年目に臨むためにも、皆様の積極的なご参加をお願いいたします。

尚、86年度会費を当日会場で申し受けます。また、財政逼迫の折り、会費納入、およびカンパ(学会ニュース27号)もあわせてご協力をお願いいたします。

1986年度日本女性学会総会および関連行事日程

時間	
6月7日 13:00	パネル・ディスカッション「日本の文化的土壌とフェミニズム」 パネラー 越 壽 昇 地域における女性の役割(仮) 丸本百合子 女性の身体観・医学の立場から(仮) 義江 明子 母性をめぐって—歴史学の立場から 溝口 明代 水子と臓について(仮) 司 会 松原 純子
15:30	休 憩
16:00	総 会 司会 三木 草子 85年度の活動内容報告 桑原 糸子 〃 会計報告 しまようこ 会計監査 雑賀・河出 86年度の活動方針 藤枝 濤子
17:00	入 室
18:00	夕 食
19:00	懇親会 担当 龜山美知子
21:00	
6月8日 08:30	幹事会 (会員自由参加)
10:00	講 演 「日本の文学批評におけるフェミニスト・クリティシズム」(仮) 木村・ステープン・チグサ 司 会 漆田 和代
12:00	昼 食
13:00	分科会 A 「性とフェミニズム」 司会 北沢 杏子 北沢 杏子 「性教育の立場から見た世界の女たち」(スライド説明) 中村 恭子 「女性の“割礼”について」 大村 芳昭 「内縁からみた婚姻—新しい結婚のあり方を考える—」 B 「マルクス主義とフェミニズム」 司会 溝口 明代 田中由布子 「マルクス経済学が無視してきたもの」 村上 益子 「ミニマリズムとマキシマリズムの分岐点」 C 司会 河野 貴代美 大河内保雪 「近代オリンピックと女性」 福井 浅子 「女性学からみた婦人福祉」
15:00	幹事会 (会員自由参加)
16:00	

大会議室

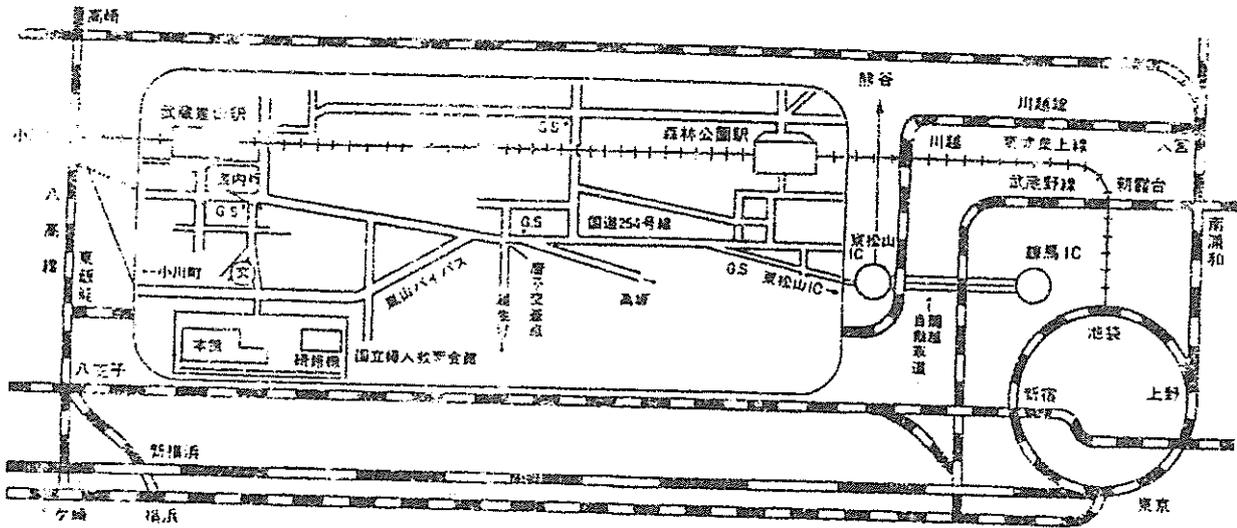
302  
301  
304

# ※総会および関連行事会場 国立婦人教育会館

〒355 埼玉県比企郡嵐山町大字菅谷728番地

TEL 0490-62-6711(代表)

## ◎交通案内



## ◎所要時間等

1. 電車 (1)池袋駅  $\frac{\text{急行1時間}}{\text{東武東上線}}$  } 武蔵嵐山駅  $\frac{15\text{分}}{\text{徒歩}}$  国立婦人教育会館  
 (2)小川町駅  $\frac{7\text{分}}{\text{東武東上線}}$  }
2. 自動車 練馬I.C.  $\frac{35\text{分}}{\text{関越自動車道}}$  東松山I.C.  $\frac{10\text{分}}{\text{国道254分}}$  国立婦人教育会館  
 (小川町方面)
- \* 定期バス利用 東武東上線東松山駅 —— 国立婦人教育会館 約30分
- \* タクシー利用 東武東上線森林公園駅、小川町駅(八高線と接続)から約15分

※池袋駅から武蔵嵐山駅までの電車は約40分間隔で、また、東松山駅・森林公園駅までの電車は約20分間隔で運行されています。

## ◎利用経費

宿泊 — 1人1泊につき1,200円

食事事 — 1日3食で約2,500円~3,000円 (カフェテリア方式)

## ◎携行品

- 健康保険証、洗面具(石けん、タオル、歯ブラシ)、ねまき、常用薬、運動靴(スポーツ・レクリエーションを行う場合)

※浴衣を利用したい方には貸し出しの用意があります。(料金100円)

## ◎参加申込み

出席される方は、至急事務局あて、下記をご連絡ください。

- ① 宿泊の有無 (6日夜、7日夜、8日夜の宿泊を希望する方は、そのいずれかも明記)
- ② 食事数 朝食、昼食、夕食についてそれぞれ記入してください。

## エスノメソドロジーと女性学

加藤 春恵子

「自明性」を問う — 「あたりまえ」と思いこんでいることを改めてまじまじと見つめ、点検する、という営みは、1960年代後半以降、さまざまなかたちでかんになってきた。「エスノメソドロジー」も「女性学」もその自明性点検の動きのなかにあるといえる。

「エスノメソドロジー」とは、人々があたりまえのこととして行なっている日常の相互作用のあり方、とりわけてそのなかでものごとに意味を与えていくときのやり方をさす。それと同時に、そうした「人々のやり方」を研究する社会学の一学派を指すことばとしても「エスノメソドロジー」は用いられている。

エスノメソドロジストは、たとえば、社会のなかで数々の断絶を経験しながらもそれを自分にも他人にも蔽いかくし、ハッピーなコミュニケーションを維持しつづけていると信じている我々の姿を突然スローモーション・カメラで撮ってみせる、といった人の悪い作業を行なう。「カウンセリングの新しい方法を開発したので来談されたし」という触れ込みで研究室に学生を招き入れて、「イエス」か「ノー」かで答えられるようなかたちの質問形式の相談をするよう指示し、隣室から伝声管で回答を与えて、それをどのように理解するかをテープに吹込んで貰ったという研究がある。この「回答」は実は予め乱数表によって決められており、相談内容とは何の関係もない。にもかかわらず、「来談」した人の大半は悩みの解決に力を借して貰ったと満足して帰って行き、研究者側から謝罪と種明かしを受けるまでからくりがつかない。「対活」の間にわけのわからない事態はしばしば起るのだが、その「断絶」には目をつぶって、コミュニケーションを行っていること、「意味のある世界」に生きていることを確信しているいじらしい人間の姿がそこに浮かび上がる。男性社会のなかで一人前扱いされぬ状況におかれながらそこにあわせて自らの役割を見出し、納得して生きようとする女の姿。夫や子どもへの不信や断絶感を押し殺して「幸福な家族」を演じつづける女の姿。与えられた状況に根源的な問いをつきつけることをしないままに自らかりそめの「意味」をつくり自らを支えるこの社会の女と男のコミュニケーションのありよう。そのなかで生じる悩みを「救う」占い師と顧客の関係 — この研究はさまざまな光景を連想させ、「我々のやっているのはこういうことではないか」という問いをとことん私たちの目の前につきつける。「いじらしい思いこみ」の関係を断ち、あるいは変えることはむずかしい。しかし、我々自身のふるまいを拡大して見ることを通して、そのいじらしさが織りなす「自明性」の世界をどこでどう断つか、どう変えるか、ということの糸口は我々に提示され、決

断は私たちに委ねられる。

「女性学」は「エスノメソドロジー」のように日常的な相互作用のレベルに話を限ることはしないけれども、これまであたりまえと思われてきた世界の成立ちにトータルにメスを入れ、自明性の点検・転換をはかっている、という点でエスノメソドロジーと問題意識を共有する。

私が学んできた、また学びつつある二つの研究領域の接点に新しい領域をさりひらいていきたいと願っている。

いま特に関心を寄せているのは「社会運動のエスノメソドロジー」、さらには「女性学のエスノメソドロジー」ということである。女性学の母胎ともいえるべき第二期フェミニズムは、1960年代後半からの一連の異議申し立て運動の一環として成立している。それ故、それは、当時の運動の内部の人々にとって「自明」な世界の意味づけ方、他者との関わり方を共有している。少数者にとどまることを恐れず、自らの認識が絶対の真理であることを信じて「わかっている者」の場から「わからない人々」の世界にメッセージを送り、それが伝わらなければ問題は相手方であり、状況にある、と考えがちな心性を私たちは共有してはいないだろうか。運動内部の者達の間には「意味」の支えあいがある限り、私たちの小世界は保持される。しかし、外側の大きな世界には、似て非なる「女性解放」の風俗は汨溢するものの、フェミニズムの真の思いはなかなか伝わらない。そんななかでもがき、もがいていることを認めようとしなくて、「わからない人たち」に責任を帰している——そんな私の姿が、私の心の鏡には映っている。こうしたあり方は私だけのものだろうか。「女性学のエスノメソドロジー」もまた必要なのではないだろうか？ 研究会のあり方を、学会のあり方を、「女性学」の伝達のあり方を、直視し問い直していく手がかりを、エスノメソドロジーから得ることはできないだろうか？ (2月8日研究報告会)

## 「フェミニスト・サイコロジーを読む」

賀 谷 恵美子

社会の性差別に傷つきながらも、そうした体制を支える心理構造を女性が自らの内部に抱えこんでいる事を認識する時、意識変革から行動変革へのプロセスの複雑性を痛感する時、私達は心理学的研究が何か有効な手掛りを与えてくれはしないかと、期待してしまう。しかし、残念ながら、従来の性差や性役割、人格特性に関する心理学的研究には女性学的視点からなるものは極めて少ない。多くの場合、程々の測定された数値は歴史的な性別役割分業体制をもたらしした必然的原因(決して結果ではなく)と解釈され、既成の「女らしさ、男らしさ」の獲得こそ目指すべき

ゴールとされる。しま氏の指摘するように、女性を取り囲む「文化的・社会的状況との関連性において意識や行動を問題にすることは拒否」され、自明視されている前提条件を疑問視することは、心理学の範囲を逸脱するものとして除外されてきた。

しま氏の『フェミニスト・サイコロジー』は、19世紀の自然科学をモデルとして学問的確立を遂げ発展してきた心理学に内在する理論的境界を、フェミニズムの視点に立って批判した初めての研究書として、画期的な意義があると言えよう。人間行動の科学としての心理学の言う「客観性、科学性」が実は、人間＝男性観と、女性の従属的状况を当然視するセクシズムに貫かれている。その理論体系と方法論の批判を通して、「生活世界を生きる人間の学へむけてパラダイム変換」という主張は、心理学を支える哲学的基盤の綿密な検討に基づいている。

こうした点を評価しつつも、若干不満が残らないわけではない。その大部分は、フェミニズムの視点が強調されてはいるが、著者の第一義的関心が方法論の検討に向けられたものであり、女性を対象とする研究そのものへの具体的分析はあまりなされていない事からくるものである。例えば性役割の発達理論への女性学的見地からの再検討の必要性は認めているが、その内容は全くふれられていない。

また、発想法や対象のとらえ方に関する基本的傾向として「男性原理」、「女性原理」という二分法を用いている事の妥当性も疑問に残る。こうした区別は、各々の性に固有な原理を指すものではないと述べられてはいる。しかし、より女性原理的発想に立つとされる人間性心理学ヒューマンスタイク・サイコロジーの研究者の中にも、エリクソンの「内的空間」と女性のアイデンティティをめぐめる議論のように、その男性中心性をフェミニズムの側から批判されているものである。最近の女性論においても、自然＝女性、文明＝男性と見なす発想をめぐって論議が活発化している事もあり、こうした二分法にはもう少し慎重でありたい。

三つ目は、社会学の胎動と比較して、「心理学におけるフェミニズムの影響を白紙」としている事に関連する。欧米ではフェミニスト研究者達の活動が両分野とも殆んど同時にスタートした。「心理学の屋体骨を揺さぶる」までには至ってはいなくとも、アメリカでは「女性心理学」という分野が70年代前半に学会でも認知をうけ、ジャーナルを発行している他、多くの論文、単行本の出版と活発な研究状況にある。日本の女性社会学もアメリカからの研究紹介に始まり、日本の土壌の中でのセクシズムへの取組みが進行中である。勿論、心理学でも、部分的な研究結果の紹介や性役割の実証研究が行なわれてはいるが、研究者の視点が明確ではなく、フェミニズムの視点に対する共感<sup>①</sup>は極力抑えられているが、または全く見られない。なぜ日本の心理学界でのセクシズムへの取組みがこうも遅々としているのかを、心理学一般の方法論批判と合わせて具体的に追求する事も、日本のセクシズム究明の助けになるかもしれない。

『フェミニスト・サイコロジー』では、アメリカの社会心理学者、C. シュリフがその論文「心理学におけるバイアス」（『性のプリズム』所収）で指摘した論点がより詳細に展開されている。シュリフも、発生当初から心理学が自然科学モデルにできるだけ近づこうとして、人間行動の要素分解・数量化、操作実験化の偏狭な科学主義に陥入り、自民族優位主義、男性優位主義のバイアスを内在させてきた事を指摘している。しかし、方法論の問題を、サイアンティフィック対ヒューマニスティック、ハード対ソフト・サイアンス、男性原理対女性原理主導の心理学という対立図式で促えることを拒否している。個人の内面世界の重視と同時に、女性の置かれた文化的社会的歴史的な文脈に注目し、その相互関係を究明するには隣接学問分野との学際的研究を通して研究の枠組を大きく拡大する必要がある事を強調している。

『フェミニスト・サイコロジー』が「学問としての精練、体系確立」を目ざすよりは、「現存の心理学がより女性学的により学際的に自らの体系を揺さぶることを望む」ならば、現在最も重要なことは、フェミニズム運動を通して明らかにされたさまざまな問題状況を、女性学的視点から取りあげた心理学的研究を量的にも質的にも拡大してゆくことではなかろうか。

現実の女性が体験するつまづきや疑問、痛みを積極的に中心テーマに取り上げるような動きがもっともっと盛んになってほしい。例えば、母親の就労と子供の心理的発達、女子青年の職業意識の発達過程、自立を援助できるフェミニスト・セラピー等、既にある程度の試みはなされている。性役割意識の発達とその変革の道すじも、単に理論的研究のみでなく、例えば家庭科の男女共修といった具体的な教育プログラムとの関連性ではどうなるか、等の実証的研究によっても解明されてゆくのではないだろうか。そうした実証、臨床、学際的研究を含めたさまざまな女性研究の積み重ねによって、今は漠然としているフェミニスト・サイコロジーの体系化が可能になるのではないかと、期待している。

（4月5日研究報告会）

## さわやかな腑分けのために、知的実験の場を

しまようこ

わたしの『フェミニストサイコロジー』をフェミニストの仲間が読んで下さり、これをサカナにして女性学の未来を語り合う時間が持てたら……という案が出されて、それに乗ってしまったわけだが、どうやらサカナはところどころ細胞液が薄かったり、過激な血を走らせたりする性格も持っていたようである。この本は、サブタイトルの「女性学的心理学批判」に蛍光カラーを塗りたいというのがわたしの心情なのだ。著者自身が納得できる「フェミニストサイコロジー」と

なるには、今後の長い射程を踏まなければならないからである。そのことへの不満の声を心苦しく思いながらも、より納得できる「フェミニストサイコロジー」の方向を、つぎのように整理できそうな気がする。

- (1) 女性の問題に、より直接アプローチできる心理学
- (2) 狭義の女性学的視点のみでなく、批判の学に徹することによって見えてくるスチールの大きいフェミニズム思想に支えられた心理学
- (3) フェミニストの共同作業によって現代心理学の各領域を書き替えるが、弱じた体系にまどまらない学際的な心理学

『フェミニストサイコロジー』を書き終えて1年たった今、あらためて「フェミニストサイコロジー」の入り口に立たされたと言うべきだろう。

コメントして下さった加藤春恵子さん、河野貴代美さん、賀谷恵美子さんには、それぞれご自分の領域に引きつけた切り口から、部分的に的確な腑分けをしていただいた。現代心理学に不満や批判をいただいている人たちにはさまざまな層があり、著者にとっては自明と思えることも、コミュニケーション論の立場からはもう少し緻密な伝達の文脈がほしいという指摘、女性の問題が十分具体的に扱われていないことへの不満、フェミニズムの視点に立つ研究や実践は、メインカルチャーの道へ漕ぎ出ることを拒否し、あくまでもカウンターカルチャーとして自立する役割をはたすべきではないかなど、心に刻まれ共感させられることも多かった。

「現代心理学はフェミニズムの影響をいまだほとんど受けていない」という記述をしたが、1970年代から各論の分野には、外国ではかなりの数の研究がなされつつあることを、わたし自信も知っている。しかし、この本ではそれらを紹介することを意図せずに、あえて言うなら日本の“いわゆる学会心理学”がみごとなまでにフェミニズムの産物とは無縁なまま安泰を保つことへの挑戦状という性格を持たせたのだった。そのため性差研究をライフワークとして高く評価されているサイコロジストを名指して批判することは、“勇気ある行為”ではなく、そうしなければ意味が半減してしまう必然的なりゆきであった。わたし自身が“いわゆる学会心理学”の評価を経て、やがて自立していくというパターンの生活史をたどることを初めから拒否してただけのことである。しかし、そういう自己限定に伴う危険をも、これからあらためて背負っていかねばならないだろう。

サカナになってマナイタに乗り、ゾウモツをすっかり腑分けされつくすなら、どんなにさわやかなことだろう。今回は十分に時間をかける余裕がなかったので、腑分けされたがっているのにメスのとどかなかった部分がうずいたまま残された。たとえば、質と量の問題をめぐるカタストロフの理論と女性学的方法論とのかかわりや、現代物理学が明らかにしつつあるマイクロとマクロ

の世界の相同イメージから示唆されるひとの心の動きのとらえ方など、自然科学的分野と手を結んだ世界である。そこには、女性性、男性性、両性性といった過程概念を一たん括弧に入れて、交際の女性性からさえ自由になっても、なおフェミニストでしかありえないような人びとが、共有の知の土壌の展開を楽しめる宝庫があるように思われる。

日本女性学会に集っているさまざまな種のサカナが、知的な実験の広場をつくり、お互に啓蒙し合うことによって、「女性性とは何か？」がもうひとまわり大きなスケールで見えてくるかも知れない。わたしたちの研究と運動を展開させてくれる資料は、対象としての外部世界に求めるだけでなく、研究会活動が生み出す内部過程からより積極的に発見されることをも期待したい。

(4月5日研究報告会)

## 1986年度幹事選挙開票結果について 10名以下/10票 11名以上/11票

去る3月29日に幹事選挙の開票を行なった結果は、以下のとおりです。(10名連記、投票総数54通、有効投票数51)

24票

28票 藤枝    27票 井上    26票 矢木    22票 亀山    21票 河野、駒尺、  
 しま    18票 松原純、桑原    16票 溝口    14票 漆田    11票 三木、青木、  
 10票 北沢    9票 田中和、田嶋、小林富、国信    8票 加藤、白井、船橋  
 7票 田川、富士谷    6票 内藤、米田、河出、渥美、館    5票 村上、ジェニスン  
 4票 井出、江原    3票 野口栄、浅野、池田、島木 福井浅、大賀、山口真  
 2票 ダグラス、平河、水田、渡辺和、竹中、飯沼、天野、岩本、三井、田中喜  
 1票 高井、小柳、野口美、宮原、越智、久谷、クラーク、須田、渡辺澄、景谷、柴田孝、  
 今井、大村、志村、松浦、広川、落合、山田明、大河内、服藤、高橋み、岸沢、庄司、ゴスマン  
 山本、プロデリック、荻野、柳、新野、窪田、平尾

幹事定数15名であるため、上記の得票数9票以上の方に対して連絡したところ、井上、田中和の両氏が辞退されました。この結果、次期幹事は同得票数の方があったため、次の16名に決定しました。

1986年度幹事(任期88年6月まで) 青木やよひ、漆田和代、亀山美知子、河野貴代美、北沢杏子、国信潤子、桑原糸子、小林富久子、駒尺喜美、しまようこ、田嶋陽子、藤枝澪子、松原純子、三木草子、溝口明代、矢木公子 (五十音順)

本会会員が行なった1985年の  
女性学に関する研究活動報告(2)

氏名	月日	内容	種別等
岩本美砂子	8・	「政治概念への“女性の挑戦” — Ch. Buci-Gluckswann の “国 家を越える政治” について —」 『法政論集』105号、名古屋大学法 学部	女性学、政治学
駒尺喜美	1・	「性役割としての男らしさ “暗夜行 路”」『思想の科学』1月号	
	6・9	「女のルネッサンス」出演(労音会 館)	ショー
	6・15	『女を装う』勁草書房	
窪田信子	10・	「余りにも見えにくい性差別」 「女性のための法律講座」 (11回シリーズ、富士宮市)	講演
		「源氏物語に見られる女性と家庭」 (11回シリーズ、富士宮市)	〃
		「老人と家族問題」(10回シリーズ、 富士宮市教育委員会)	〃
		『都市問題研究』10月号	
	10・	「婦人活動の評価の仕方」(静岡県 教育委員会)	講演
	12・2	「今、女の生き方を考える — 過去 から未来へ —」(静岡県・総理府)	〃
船橋邦子	4・23~30	「アジア女性会議」出席「日本の女 性の現状」(フィリピン・ダバオ)	他に講演活動9回 報告
	6・1	「国際フェミニスト会議」(IFJ 主催)「日本のフェミニズムの源流」	〃
	7・20	『ふたつの文化のはざまから — 大	翻訳

氏名	月日	内容	種別等
藤枝 滂子	11・29	正デモクラシーを生きた女』青山館 「産む性について」(お茶の水女子 大学女性文化資料館研究会)	パネラー
	4・	「UNESCO/ISS 高等教育におけ る女性学セミナー」(オランダ・ ハーグ)	国際会議
	9~'86/2	「京都市婦人問題セミナー '85」	コーディネーターおよび講師
	11・	日本婦人会議(東京)	講演
	2・	「ウーマンリブ—女の戦後史」朝日 ジャーナル(『女の戦後史Ⅲ』に再 録)	
亀山 美知子	3・	「ものの見方—西欧ヌード絵画と 女性」『木野評論』精華大学	ジョンバーガー/共同研 究グループ共訳
			その他、国立婦人教育 会館 女性学講座共同 企画委員、ほか活動多数
	2・18	「自立した女性たち—明治20年 代の看護婦像」(大阪鉄道病院附 属高等看護学園)	講演
	3・14~15	「戦争と看護」(全国自治体病院看 護婦集会、神戸)	〃
	11・14	「明治期女子教育における看護教育 の位置づけについて」(第16回 日本看護学会—看護総会)	学会発表
	7・13	「女性学よもやま話」(滋賀県主催)	講演
	8・	『近代日本看護史Ⅱ・Ⅳ』ドメス出版	他に研究報告1、講演1 出版(共著)1
溝口 明代	5・12	「反近代思想の歴史」、シンポジウ	パネラー

氏 名	月 日	内 容	種 別 等
		△「フェミニズムはどこへ行く」 (女性学研究会)	(松華堂書店より出版 9.20)
	7・14	「近代がもたらした女性問題 — イ エについて」(N.G.Oナイロビ 会議)	N.G.O「ワナナケ・ ワ・ジャパニ」 報告
	10・	「ナイロビの感想」『助産婦雑誌』	11月号
	11・	「愛と性 — ハーレクイン・ロマン スから」明同大学国文研究室	講演
	10・	「メキシコからナイロビまで」『女 から女たちへ』№50	他に報告1

## 会 員 住 所 変 更

渥 美 育 子

大 賀 美 弥 子

山 口 真

## 編 集 後 記

また総会の季節がやってまいります。前号でお知らせした開催期日が変更されておりますので、お気をつけ下さい。

幹事選挙が行なわれましたが、投票率は前回より低く30%台になっております。最近の複数党派推薦による地方自治体首長の選挙のような関心度の低さに似ております。この1つの原因は、会員相互の交流がはかり難いということも考えられます。総会等の催しは積極的に参加して頂きたいものです。

会の財政的危機が深刻になってきました。会費収入のみに頼る運営のあり方からの脱却が、真剣に考えられ始めています。皆様の良いアイデアをお聞かせ下さい。

今回は、加藤春恵子さんの「エスノメソドロジー」と、しまさんの「フェミニスト・サイコロジー」の接点をその方法論においてまとめてみました。 ( 亀 山 )

学会ニュースでは、常時、皆様からの御意見・レポート等を受けつけておりますので御投稿下さい。なお、原稿はお返ししませんので、必要な方はコピーをおとり下さい。

発行 日本女性学会

頒価200円

〒350 川越市三久保町13-1 川越郵便局私書箱35号

( 郵便振替口座 東京 8-49189 )  
住友銀行日本橋支店 普通口座 451169

